

自立信仰(Iサムエル記3:1-5)

良い教会から良いレムナント、信者が育つということは言うまでもありません。だから、私たちは教会のために祈り、また献身をしなければなりません。しかし、裏返して、それを逆論理と言いますけれども、教会があまりよろしくないのです、そこでレムナント、信者はしっかり育つことができないということももちろんその通りなのですが、ここで私たちは吟味して問いかけないといけません。それがすべてなのか。信者、またレムナントがちゃんと育たない責任は教会にあるものなのか。それを否定するつもりはありません。しかし、教会がだめなので、その教会にいる信者、レムナントもだめだということが動かない法則なのかどうかということを吟味して問いかけないといけません。そうでないと、私たちは教会のためにお祈りを捧げないといけないのはもちろんなのですが、教会のさまざまな事情によってそれに左右される信者になりがちなのです。本当に福音の信者はそういうものなのでしょうか。今日、聖書に登場しているレムナントだったサムエルを通してそのことを確認して考えていきたいと思いません。

皆さんご存知のように、サムエルの時代は教会が全く無気力なそういう時代でした。いわば士師記という時代の末期の頃にサムエルが登場しました。士師記は各々自分の意見のままに神様と神様のみことばとは全く関係なく動いていたそういう時代です。その末期の時代にサムエルは生まれて暮らしました。教会が無気力であり、また教会の指導者だった祭司、今日聖書に出てくるエリという祭司は無能な存在です。そして、祭司の息子たちは墮落の道を走っていたということが聖書に記されています。当然、神のみことばが途絶えてまぼろしが示されることはなかった、そういう時代です。神のみことば、契約のいのちのみことばが語られて、それに恵まれて導かれるべきなのに、それが全くない教会になってしまいました。なので外部の敵、隣の国ペリシテからいつもやられっぱなしのそういう状況だったときにサムエルは生きていました。では、そのような状況だったのでサムエルはだめだったのでしょうか。サムエルは育たなかったのでしょうか。聖書にそういうことはどこにも書かれていません。

そのように全く希望のない状況の中で、第一、神様は神様自らレムナントを召されて、レムナントを立てられたということが聖書の証言です。

教会が教会らしくなり、しっかりレムナントを育てて、また福音宣教の契約の道を行くということが望ましいことであり、そうなるように祈らないといけません。しかし、そうではないからだめなのかと言いますと、神様は教会が無気力だからといって、神様ご自身も休むわけではありません。神様はそういう希望のない状況の中で自らレムナントを召されて、レムナントを立てられるそういうお方でありませぬ。そこでそのような希望のない状況の中から、サムエルはナジル人として召されることとなります。ナジル人というのは、全く希望のない、教会も契約を失い無気力な状態なのに、それに染まらずに神様へと聖別された者、契約の中に聖別された者として、神様はサムエルを召されました。だからサムエルはその時代に残された者として生きて行くようになります。社会の困難、教会の無気力、教会の墮落などに全く影響を受けることなく、それに溺れることなく、契約を握って生きる者、それが残された者という存在です。神様は希望のない、教会までもが無気力になってるそういう状況の中で、神の人を、レムナントをそのように召されるそういう神様です。それで神様はレムナントのサムエルに絶対契約を握らせませぬ。教会がだめなので、説教がデタラメだから契約を握ることができないということは一理はあるけれどもすべてではありません。それが固まっている法則になってはいけません。そのような希望のない状況の中で、サムエルは神様から絶対契約を与えられて、その絶対契約を握るようになります。どんなに状況が険しくても、どんなにだめな状況でも絶対キリストなのです。ただのキリストではなくて、絶対キリスト、そういう状況に左右されない契約なのです。絶対神の国、絶対聖霊の力という神様の契約を握ることができました。正確に申し上げますと、神様が握らせたということです。なのでサムエルは、その絶対契約を握ったレムナントは、残された人、契約の人は、その状況に飲み込まれることなく、それを乗り越えられる超越の信仰に立つことができるようになります。つまり、教会がだめなので私はしょうがないよ。ちゃんと聖書を教えていないので、私は聖書を知ることができないという言い訳、不平不満などは、その人には関係ありません。それがレムナントという存在です。私たちの頭の中には、

AなのでAになるしかないという法則が見事に刻まれているのです。それを否定するつもりはありません。一理があるし、部分的には合っている話なのです。しかし、それがすべてではないということ聖書を通して、また歴史を通して確認しなければなりません。本当にだめな状況でした。教会も崩れていくそういう状況でした。しかし、レムナントは崩れることはありません。その法則に、サタンは騙しごとに、自ら乗り込んで囚われてはいけません。それを破るのがレムナントなのです。親がだめだから私もだめ、家庭環境がだめなので私もこうなるしかない。それは一理はあるけれども、嘘ではありませんけれども、それがすべてではありません。それは神様の絶対契約を知らない人の言うことなのです。キリストがどういう方なのか知らない人が言うことです。イエスがキリストだという信仰告白で自分の人生の答えを出している者はそういうことは言いません。逆にだからこそ今私が存在している。だからこそ今私が召されている。だからこそ神様は今私を呼んでいらっしゃるんだと。そちらの方に目を向けるようになるでしょう。このような人を Only の信者と言います。そういう人は自立した信仰者として歩いていくようになります。この自立した信仰というものは、状況や今の環境やさまざまな事情に飲み込まれることなく、影響を受けることもありません。それが自立した信仰です。教会がこうなので、社会があだだからと、それに一緒に振り回される人は自立の信仰ではありません。小さな子ども、レムナントだからといって信仰が持てないわけではありません。大人に良い影響を受けることは幸いなのです。しかし、大人が思わしくないからそれに左右されることは、大人の問題ではなくて、教会の問題ではなくて、自分が自立した信仰に立っていないからなのです。なぜ自立した信仰にならないのでしょうか。いつまで経ってもAはAと何かの法則に囚われているからなのです。それをはるかに上回る、それに全く左右されない神の絶対契約を握っていれば、その人は自立した信仰になります。Only の信仰になります。まったく希望のない状況の中でサムエルはそのように神様に召されました。

2.そして、そのように召されたレムナント、絶対契約を握っている者は、つまり、Only の信者、自立した信仰を持っている信者は、現実には縛られることなく御座の祝福の中に入って行くようになります。これをいわば24と言います。

もう一度言います。Only の信者、自立した信仰を持っている信者は現実には縛られることなく、御座の祝福の中に入って行くようになります。サムエルは12:23でこう言っています。「私もまた、あなたがたのために祈るのをやめて主に罪を犯すことなど、とてもできない。私はあなたがたに、よい正しい道を教えよう」と。サムエルは祈りの人でした。希望のない状況の中でがっかりしてため息をするのではなくて、だからこそ絶対契約を握ってそこに影響を受けない自立した信仰を持って、Only の信仰に立って、それができているものは現実ではなくて、人間の計算では明日地球が壊れる予想があっても御座の祝福を見上げて御座の祝福の中に入る祈りの人になります。だからこのような希望のない真つ暗な状況なのに絶対契約を握っていたレムナント、御座の祝福を見上げていたレムナントのサムエルには言うまでもなく御座の祝福が現れて、生ける水の川が心の奥底からあふれ出ているはずなのです。だから、教会がどうのこうのに左右されることなどありません。社会がどうのこうのに左右されることなどありません。自分の都合がどうのこうのに左右されることなどありません。今の小さいレムナントのひとりひとりが、小さい時期にこのサムエルのような自立した信仰に立つということが私たちの祈りの課題なのです。世の中では、また自分のレベルに従って生きて行きますと、AにはAという因果応報から逃れることはできません。それが別に人が悪いか良いかとは全く関係ありません。それが世の法則なのです。信者でさえ契約が分かっていると、それに縛られることになります。だからいつまで経ってもずっと荒野をぐるぐる回るしかありません。信仰の神秘やエキサイティングな展開などは期待もしません。このように祈りによって現実には縛られることなく、御座の祝福を見上げるようになったサムエルには、今まで途絶えていたまぼろし、神様の啓示のみことば、契約のみことばが回復されるようになります。これこそ喜びなのです。3:19を見ますと、「サムエルは成長した。主は彼とともにおられ、彼のことばを一つも地に落とさなかった」。そして、3:21には「主は再びシロで現れた。主のことばによって、主がご自身をシロでサムエルに現されたからである」。今までまぼろしが途絶えていて、神のみことばが途絶えていました。教会はあるのに神のみことばのないそういう教会になったその頃に、絶対契約を握って、その状況に左右されない Only 自立の信仰を持って御座の祝福を見上げていたサムエルには御座の祝福が現れると同時に、神のみことばが回復されるようになります。だから、その状況がどんなに崩れていても一緒に飲まれることなどありません。みことばがありますので。そして、そのサムエル本人に回復されたみことばはそこにとどまらないでみことばが運動になります。それでミツパというところ

ろにイスラエルの民全体を呼び寄せて、このままではいけません。悔い改めなさい。水を注ぐように悔い改めて神様に立ち返りなさい。みことばを信じなさい。契約を信じましょう。サムエルに現れました、サムエルの内側から回復できた神のみことばはいのちあるものなので、それが運動になって周りを動かすようになります。これがレムナントの祝福なのです。自立した信仰者に現れる神の祝福なのです。Onlyの信仰を持っている人に神様が与えられる答えなのです。皆さんがこの答えの主人公になることを祈りたいと思います。

御座の祝福を回復して、みことばを回復して、そのみことばが運動になることによって、結局崩れていった無気力になっている教会を回復するようになります。教会改革につながるようになります。サムエルのときだけではなくて、今までの歴史を見ますとずっと同じことの繰り返しなのです。サタンは教会をだめにしようとして、あらゆる攻撃を仕掛けます。教会がそれに見事にやられて、教会らしい姿を失うことがあります。だからだめになるかと言いますと、そうではなくて神様は生きていて神の契約は止めることができないし、邪魔されることはできません。神様は其中でレムナントを残されてレムナントを召されて、そのレムナントを通して絶対契約を回復して、みことばと祈りを回復させます。それが必ず運動になるように神様は働かれる方なので、それを今の私たちの契約として握りましょう。そしてその結果、7:12-14にこう書いてあります。「そこでサムエルは一つの石を取り、それをミツパとシェンの間に置き、それにエベン・エゼルという名をつけ、「ここまで主が私たちを助けてくださった」と言った。7:14「ペリシテ人がイスラエルから奪った町々は、エクロンからガテまで、イスラエルに戻った。イスラエルはペリシテ人の手から、領土を解放した。そのころ、イスラエル人とエモリ人の間には平和があった」。今までにあった戦争が終わり、その時代のわざわいを止めるようになりました。これが一人のレムナントが自立した信仰に立ったときの結果なのです。でも、99.9%の人は教会がだめだから、社会が混乱しているのではないよ。仕方がありません。だから私はこうなるしかありません。私が信仰に立てないこと、自分の信仰生活が成り立たないのは教会のせいだ、社会のせいだと言えません。99%、99.9%の人は信者でさえそういうつぶやきをしまいます。それが嘘ではないから見事に騙されることになります。しかし、レムナントの皆さん。契約を信じている私たちは、それに惑わされてはいけません。教会がだめなのでレムナントがしっかり育たないという逆論理は成り立ちません。ある部分は合っているけれども、それがすべてではありません。それを法則のように固めてはいけません。その法則を破るのが絶対契約なのです。絶対キリストであれば、牧師が変な人間でも大丈夫なのです。むしろだからこそ、その絶対契約がより固いものになり、より天の御座を見上げるようになるのではないのでしょうか。今現在、牧師がだめだから、皆さんに弁明しているわけではありません。うちの教会の事情を話しているわけではなくて、たとえそういうことがあったとしても、それが言い訳になってはいけません。

レムナントの皆さん、また信者の皆さん、教会を大事にしないとはいけません。だから、教会が神様に喜ばれるしっかりと福音を握って福音を教えることができる正しい教会になるように祈らなければいけません。また、献身しなければいけません。そして、皆さんは教会を通して恵まれて、教会を通して力を受けるようにしなければなりません。そして、教会とともに神の契約の道を歩いていくという教会の人、幸いな信者でなければいけません。これは言うまでもありません。

しかし、もし万が一このような教会の恩恵がないとしても、だから自分の信仰生活は成り立たないとは言ってはいけません。このような恩恵、別の言葉ではシステムとも言えるでしょう。そういうものがないから自分の信仰生活が成り立たない理由にはならないということを気をつけないといけません。

韓国の立派な教会に通っていた学生さんが海外留学に行くときがしばしばあります。彼らが行って、その教会は韓国の教会と事情が大分違うので戸惑い、今まで良い信仰者のように思っていた自分が、周りからも驚かれるほどに信仰生活がぐちゃぐちゃになってしまうケースがほとんどなのです。なぜなのでしょう。海外にいる教会はもちろん小さいシステムとして韓国の立派な教会のように整備されていません。それが理由なのでしょう。そう思うのです。自分が韓国にいた頃からシステムに乗っていることは幸いなのですが、それはシステムのゆえに成り立っている信仰に過ぎないもので、自立した絶対信仰ではなかったという裏返しなのです。ある韓国の学生が日本に来た時にも一番最初の質問が「この日本には大学伝道学校はありませんか」でした。「ごめん。まだ日本は大学伝道学校というシステムが整備されていないね。これから祈っていこう」と言ったら、「ええ、どうしよう。私はそのシステムがなければだめなんですよ」という人が実際にいました。十分わかりますが、そのようなレムナントとして育ててはいけません。教会が立派でいろんなシステムがしっかりと整備されていることは望ま

しいことだし、そうして行かないといけません。しかし、それは別の意味があって、それがないとレムナントが育たないというような、レムナントから自立した信仰、絶対信仰を奪うようなものになってはいけません。ヨセフは聖書ありませんでした。日曜日に礼拝も捧げることもできませんでした。奴隷だったので。サムエルは幸い契約の箱の横で寝ていたのですが、自分に正しく福音を教える指導者もないし、教会全体、イスラエル全体が暗いそういう時期でした。だから私はだめだとなったのでしょうか。神様はそういう方ではありません。私たちが自分のレベルで勝手に計算して勝手に思い込んで勝手に評価するだけなのです。その法則を破ることが信仰なのです。その法則を破る武器がみことばなのです。自分の思いや自分の感情や計算などを捨てて、今日の神のみことばを見ると、教会がだめだからレムナントが育たないということは法則になりませんということが確認できるのではないのでしょうか。ぜひこの契約を握りましょう。信仰が正しく成長することに一番敵になるものが言い訳です。その言い訳をするということは嘘ではありません。あらゆる事実に基づいての言い訳なのですが、しかし、それを裏返しますと、目に見えない御座の祝福とはまったく無縁な信仰であり、絶対という契約とは全く関係ない信仰だという裏返しではないのでしょうか。それが言い訳というものなのです。

最後にまとめましょう。教会が崩れても私は崩れない。私には絶対キリスト、絶対契約、世界福音化。そして絶対御座の祝福。どんな状況も奪うことができない御座の祝福があります。そして、たとえ正しく教える者がいなくても、私には絶対聖書があるのではないのでしょうか。皆さんが絶対契約を握ってキリスト、御座の祝福、世界福音化の契約に立って聖書を見ますと、聖霊様が皆さんに自ら教えてくださるはずなのです。これはもう一度言いますが、教会はいらないとか私一人で充分だ。そういう意味ではありません。しかし、教会を通して恵まれることは幸いなのですが、教会に影響を受けて、それが信仰生活が成り立たない理由になることはないように。つまり、自立した信仰者としてレムナントだけではなくて、大人の皆さんも自立した信仰者としてしっかり立って、周りが見て驚くようにおあかしができる証人として立たされる、そういう主人公になることを祈りたいと思います。

(祈り)

恵み深い父なる神様。ありがとうございます。サムエルは教会がだめなときでも、むしろ絶対契約を握ってその状況によって奪われない御座の祝福の中に入って、そして、むしろ教会を生かす主人公になりました。どうかこのみことばを通して、今まで私たちの中にあつたその法則が砕かれて、神のみことばが私たちのものになるようにひとりひとりを祝福してください。皆が絶対契約を握って、そして、御座の祝福を武器にして自立した信仰者として立つようにひとりひとりを励ましてください。イエス・キリストの御名によってお祈りいたします。アーメン